

身体と混血（レジュメ）

立命館大学 谷 徹

「現在の体は作られたものである。まあ言へば生まれたものである。此の体が作られたものでありながら作ってゆく、自分の体を超えて子孫というものを生んでゆく、つまり作られたものが作るのである。それが創造の世界である。我々はさういふ世界の一つのエレメントである。」（『西田幾多郎全集』第12巻363頁）
「日本人の生産した物は日本人を動かすが、生産された物は公のものになるから支那をも動かし、又支那の生産した物が日本を動かすといふこともあるであろう。」（367頁）。

はじめに

問題設定：現象学運動と西田哲学は「歴史的な身体」に関してどう切り結ぶのか

事象と言葉

事象と言葉の固定化的な捉え方

事象は現象化してくる。言葉は（現象化するのみならず）現象化の媒体となる。身体はこの両面性をもつ。

準備概念：名詞、動詞、指示詞（人称代名詞）、前置詞……

現象学運動における身体と意識

フッサールは身体を排除したか？

「身体なき意識」(leibloses Bewußtsein; Hua III/1 S.119)

「心なき意識」(seelenloses Bewußtsein)

「意識」≡「作用」≡「機能」(『論理学研究』『イデー I』)

ハイデガー

手前存在と手元存在

「身体」(Leib)と動詞的な「身体化」(leiben)

メルロ＝ポンティ

「〈世界の肉〉、それは私たちの世界内身体の比喩などではない。逆のことが言いうるだろう。世界と同じ感性的生地で織られているのは、私たちの身体でもあるのだ、と。」

脱名詞的思考

「現出者が現出する」

名詞的ノエマと動詞的ノエシス

「存在者が存在する」＝（「現出者が現出する」＋「現出者が持続する（とどまる）」）

「存在」＝（「現出」＋「時間化」）

→ (「現出」 + 「歴史化」) = 「歴史的存在」

「私」: 指示詞・人称代名詞 → 特殊な〈場面〉を指示する

「私」: 「中心化機能」 → 名詞的であるよりも動詞的

時間亀裂と時間統合、格分裂と格同一化、人称共同と人称離脱

身体の機能と現象化

「キネステーゼ意識」: 「b 成分」と「K 成分」

参照: 「自分の体の中から自分の体が変わるのではなくして、外から自分の体が段々わかってくるのである。」(西田: 358頁)

受動的総合と自己触発と身体

「抗争」と「合致」

「それ自体で際立ってくるもの」

「触発の場」

「原自我」の「触発」による「私(自我)」の成立

→ 身体

参照: 「身体無くして自己はない」、「併しながら……身体は即ち自己であるとして自己と身体を一つにしてしまう考も本当ではない」(350頁)

「トラウマ」と「反復強迫」

「おのずから」と「みずから」

「み」「躬ら」

意味と現象化と歴史的身体

「意味」(Sinn)と「送る」(senden)および「使命」(Sendung)

参照: 「それは一つの創造的使命を持ったものである」(367頁)。「……世界には自分自身で動いていく世界の動きの方向がある。其の方向に対する機能、其の世界の動きに対して部分部分が持つてをる機能、それに依つて身体を持った我々人間が成立つのである。」(359頁)

歴史的身体の現在

参照: 「日本人の生産した物は日本人を動かすが、生産された物は公のものになるから支那をも動かし、又支那の生産した物が日本を動かすといふこともあるであろう。」(367頁)。

身体自身の(間文化的)現象化: 「文身」の概念・「文化」の概念

「文身」された「私」: 非対称性

しかし、純粋文化はない

いつもすでに、しかし、現在ではより多く「混血する身体」、「混血する言葉」

間文化現象学と西田哲学